2Sa-8

生活技能構造の教育実践的研究（2）
―並縫い技能における上位群と下位群との比較―

○武川素子　笠井直美　大澤清二（大妻女大）

【目的】手縫いの中で最も基本的かつ重要な技能である並縫いは、小学校から学習することになっている。しかし前報で述べたようにこの技能を習得していない学生も多い。
並縫い技能の習得にはどのような点が重要なのだろうか。このような問題意識から以下の問題について検討した。
①並縫いスキル及びパフォーマンスにおける上位群と下位群との比較
②並縫いスキル及びパフォーマンスにおいて、指導後下位から上位になった群と指導前後ともに下位であった群との比較

【方法】短期大学生100名を対象として平成６年１０月に、並縫いの実験を行った。
並縫い１回目は学生に各自自由に縫わせ、その後正しい並縫い方法を指導し、１週間後に２回目の調査を行った。針は木綿縫い針3の2、糸はカタン糸30番（黒）を用い、用布は長さ100cmの晒木綿（並幅）を幅二つ折りにして用いた。

【結果】調査の結果以下のことが明らかになった。
①並縫いスキルの上位、下位およびパフォーマンスの上位、下位とも、針目長のばらつき、正確率（曲がり）等で両群間（上位・下位群）に有意な差が認められた。
②指導前にはスキル、パフォーマンスとも、ほとんどの項目で上位群と下位群との間に有意な差は認められなかった。指導後には両郡間で針目長のばらつき等に有意な差が認められた。